

も何も起こらないという保証はありません。大災害や大事故はいつ起こるか予測がつかないのであって、これまで愛知県から出動要請がなかったからといってこの先安心して、油断することはできません。そういった意味からいけばいつ、何どき出動要請があっても即出動できるように常に心の準備はしています。

**Q.**常在戦場ではありませんが、常在『現場』といった気持ちは持っているということですね。DMATチームのスタッフは大変ですね。

**鮫島看護師**／365日24時間常に待機体制にあるので日常生活の中で緊張感を絶やさず、そして何事も起こらないように願っています。

**伊藤業務調整員**／同じ気持ちですが、いざ出動ということに備えて万全の体制は常日ごろから取っています。

**森業務調整員**／私と伊藤さんは、DMATチームの連絡や情報の収集が主たる仕事の内容なので、現場に出動した場合に備えて日頃から得た情報をいかに正確に、また、的確に武内副院長や鮫島看護師に伝えたらよいかということをシミュレーションしたり、そうしたことに関する情報の習得などに努めています。

**武内副院長**／伊藤さんや森さんは、大災害・大事故現場に行けば直接医療活動をするということではありませんが、現場は大混乱が予想されます。そうした中で、2人の業務活動によって混乱を防ぎ、救命・救助活動が効率よくでき、効果的に行うことができるので2人の業務は大変重要です。

**伊藤・森業務調整員**／大災害、大事故現場で私たちの業務がいかに大切かを自覚し、実際の医療現場に駆けつけた時は沈着冷静に対応するよう心がけています。

**Q.**DMATチームになるには資格はいりますか。

**武内副院長**／厳しい講習を受講し、資格を取らなければなりません。

**鮫島看護師**／先日も研修に行ってきましたが、その一端を紹介すると、3泊4日の

日程で災害医療論、DMATの意義、実習・災害現場での情報通信、実習・災害現場での傷病者観察手順とトリアージ(医師・看護師)などその内容は理論から実践まで多岐にわたっています。

**Q.**かなり密度の濃い内容になっていますね。**武内副院長**／机上の内容ではなく、実際に大災害・大事故現場に出た場合、即救命・救助に役立つ内容になっています。

**Q.**そもそもこのDMATチームが発足したきっかけは。

**武内副院長**／1995年1月に発生した阪神・淡路大震災で、初期医療体制がうまく機能していたならば500人前後は生存の可能性があったという報告が出され、犠牲者を少しでも減らし、貴重な教訓を生かし、一人でも多くの人を救命・救助するためには初期医療体制が重要だという反省から都道府県にDMATチームが発足、現在全国で1000前後のDMATチームがあります。名古屋記念病院は今年発足しました。

**Q.**名古屋記念病院内での研修は。

**武内副院長**／マニュアルの説明や部署ごとに初期対応の仕方、近い将来発生することが予測されている東海・東南海地震など大災害が発生した時、院内が混乱しないために院内に緊急地震速報を流し、災害本部を立ち上げるといった実際に起こったことを想定したトレーニングにも取り組んでいます。

**鮫島看護師**／看護師としては、外来なら外来、病棟なら病棟といった各セッションで災害に対応した訓練や学習などを行っています。

**森業務調整員**／まだ、具体的なものはできていませんが、大災害・大事故に即応した綿密



で、具体的なマニュアルを早急に作らなければと思っています。

**Q.**大災害・大事故となると周辺地域を巻き込んだものになると思います。地域との連携は。

**武内副院長**／大災害や大事故、特に大災害の場合は、一地域に限定されるものではなく、ひとたび大災害が起こるとその被害は広範囲にわたるので、当然のことながら周辺地域との連携は不可欠となります。こうしたことから、すでに地域の集会などから呼ばれたり、こちらから積極的に働きかけて講習会などを利用して地域住民の方々に話しています。

**Q.**反応はどうか。

**武内副院長**／東日本大震災の記憶がまだ生々しく残っているので、皆さんは真剣に話を聞いていただいています。

**Q.**今後の取り組みは。

**武内副院長**／大災害や大事故が起きて出動要請があった場合は直ちに対応できるようにDMATチームの質を高め、そして、現場に出動した時には日ごろの訓練を最大限に生じて十分にチーム力が発揮できるようにトレーニングを積み重ね万全体制が取れるように心がけていきたいと思っています。

